

24-29

特67
962

明治中學會編著

中學全書

一言文
致文

作句法講義
全

發行所
東京
明治中學會

087066-000-8

特67-962

作句法講義

明治中學會

M45

DBE-0237



作 句 法 講 義

緒 言

俳句は詩の一種類である、詩に形式と内容との二つの事がある、故に俳句にも形式と内容との二つの事がある、俳句の形式とは、五、七、五に分れる十七字から出来上つて居るのである、然しながら十六字や十八字のものもあるけれど、これは一般の俳句の格調形式でないのである、俳句の内容といふのは何でも作者の感じたことを此の形式に入れて詠むだけ構はぬので、柳の枝が風に吹かれて動いてゐるといふことでもいゝ、即ち景色ともいふべきである、夏であつて蚊がブン／＼唸つてゐる中に夫婦げんかをして居るといふことでもいゝ、即ち人事ともいふべきである、子を無くして悲しいといふ思ひを云ふのもいゝ、即ち抒情の俳句である、尙之れを客観的に、主観的に、理想的に歌ふのもいゝ、

或人は俳句は抒情のものであるとか客観に限らるゝとか云ふけれど、これは俳句の一部分を見た偏した考へに過ぎぬのであつて、取るに足らぬので俳句の内容は、自分か感じたものを歌ふ上に於て縦横自在である、けれど此處に断はつて置くことがある、それは卑しくも詩である以上、俳句の中に理屈を入れては可けないといふことである、

45. 3. 28

内 宛

作句法

此處では俳句の議論ではない、作句法であるから、直ちに本題に入るとしやう、句を作る上に、經驗が積めば論じることゝ出來、尙肯づくことゝ出來る、鯛を食はずして鯛の味を論ずることは出來なす、

季 僅か十七文字の俳句であるから、うの中へ、作る人の眼に於て、感じたことを充分、云ひ込まうといふのである上は、何か簡単な語で廣い意味を現はすものが必要である、そこで、季の必要が起る、この季がある爲めに俳句は、深い廣い聯想を興へる、季が入つて無ければ俳句でないと言ふた人がある程である、季の事を見るには馬琴の編した俳諧歳事記は永い間賞讃されたもので、尙現代になつて此の種の木が種々出來た、

先づ句を作つて見やうと思ふたなら、容易に出來る、長い堤がありて、家などが遠くに小さく見え春風は暖かに吹く處の景があると思へば即ち「春風や堤長うして家遠し」といふ句と全じのものであつて、この句は佳句である、

初學の人には此の景色は見ながらも如何して十七字を纏めやうと云ふ事が一寸難づかしいのである、その上に御注文の通りに、いゝ俳句の内容ともいふべきものをやる事が、むづかしい場合には、

作句法講義

柳なら柳といふやうなものを一つ此處に考へて見る、そして、雨、風、雲、雪、虹、霧、等の天体のもの或は野、山、川等の地理に關するもの或は鳥、獸、人物、等の動物、或は家屋、門戸等の建築に關するもの或は、粟花、木等の植物、或は歴史的聯想のある地名等どれも此れ等及他の物を、その歌はうとする、柳に付け合して見る即ち配合して見ればその想は面白く句は口を突いて出るのである、この柳に雨を配合して見やうか、

夕柳音なき雨となりけり

白圖

又、動物の鳥と配合して見やうか、有名な、一茶の句と全じになる、

けろりくわんとして鳥と柳かな

一茶

又、植物に付けて見やうか

梅ちりて淋しくなりし柳かな

蕪村

又、建物に付けて見やうか

柳見よ藏のあと先くりかへし

杉風

この他、戀とか寺とかを配合して見やうか、

よき人と連立ち歩く柳かな

野村

尼寺の軒に淋しき柳かな

蘇仙

作句法講義

等幾程でも出で来る、句を作ることを練るには先づ初學者には是れが一番いゝのである

先づこれで句を作ることは下手でも出来る俳句には如何んなものがある俳句にはどんな種類があるかといふことを段々と説明しやう、

前述の形式、内容の下に成る俳句が又、種々の特質をもつ、その特質に依つて右の如き分別が出来る、即ち、客観体、主観体、理想体、複雑体、單純体、人事体、滑稽体、即興体、双對体、譬喩体、擬人体、小説体、妖怪体、等まだ區別したら幾何程でもなるが此の程度で充分である、この中、始めの三種、客観体、主観体、理想体の中へ複雑体以下は含ますことが出来る、故に主なるものは此の始めの三體である、

客観体、とは初學者は、この客観体から作り始めるのが可い、是の體は、餘韻の深い、聯想の多い、蘊蓄の深い句體である、作る人の智識を離れて、ありのまま、を書く、歌ふ、作る人の意見とか理性的の判断とかのが加はらぬから理屈もなく、考へもなく天真流露の句が出来るのである二三三ッ例を擧げる

春風や堤長うして家遠し

彌村

清水の上から出たり春の月

凡兆

二の三つ雁に遅るゝ帆影哉

吟江

主観体、とは智識的に働らく事で即ち、一つの物を見、事を思ふた時、作る人が自分の感情とか意見、判断等によりてその事を詠むのである、自己が主となる故、自己を離れて詠む客観とは其處に差がある、

去年より又淋しい秋の暮

蕪村

春なれて二日の門の樂しけれ

柳好

夕霧が塚にて

此の塚は柳なくても哀れなり

鬼貫

秋深き隣は何をする人ぞ

芭蕉

主観体は智識的であるけれども理屈ではないといふことを注意せねばならぬ

理想体、とは理想的、架空的の想を詠むものである、けれど極端な人の思ふことが出来ぬほどの、理想は妙でない、然しながら人の思ひうる、座して海底を探り、臥して空中の樓閣に行く事ならばその範圍は自由である、歴史上に清正、加藤肥後の守の酒を飲んだことが明かにないにしても、清正が酒をのんだことは、あり相であれば、が、張飛と清正とが戦つたといふことは理想だと

いふても人一般の感じえぬ處だから可けぬのである、下に挙げた例を見れば能く分かること、思ふ、

乾銚や琴に斧打つひいさあり 蕪村

蜻蛉や果敢なき夢を夏の月 芭蕉

此の村の人は猿なり冬木立 蕪村

行燈を消せば鼠の年忘れ 丈艸

蜘蛛の巣は暑きものなり夏木立 鬼貫

以上の三躰が俳句の躰の要素である

復雑躰、とは内容の復雑な、配合の多いもので、主観と客観に含まれる、主観となれば時間的に

動作的に、客観となれば名詞が好く入れられるのが常である、この主観に入る方は初學者の爲には無理である

鶯の二度来る日あり來ぬ日がち 凡菫

の如きである、尙この以下は、前三躰から説けるのだから、くゞしく云はぬ事とする

單純躰、とは是れも主客兩觀に含まる、單純躰はすらくと、した處に妙があるその例としては

ひよろ／＼と猶露けしきや女郎花 芭蕉

津艸と共に流る、笠かな 吟江

即興躰、とは直感である、主観のみであると云ふても、思ふこと賦つてゐるか 曲翠

即景躰、とは即興躰と反對で客観に入るべきである、字の如く即興の俳句である、例

梅が香に、のつと日の出る山路かな 芭蕉

人事躰、主観、客観、單純、復雑、の別は無い、前に述べた句の較の壁の中にいさかふ夫婦かな

(李由)の如きである、人間万事を詠んだもの、

小説躰、とは、小説的な事柄とか、物語の一節の如きで人事の中に含むことも出来る、

御手討の夫婦なりしを更衣 蕪村

妖怪躰、怪物の動作とか、妖怪に擬して讀むとかである、

化けろふな傘かす寺の時雨かな 蕪村

滑稽躰、とは駄じやれ、や、可笑しいとのみではない、雅致あり面白味ある可笑しみである、妖

怪躰や、此の躰は老熟の人にあらざれば難いのである、

戀猫のぬからぬ顔で戻りけり 一茶
譬喩躰、とは字の如くある物を他の物に譬へることで例としては

蒲團着てねたる姿や男山 嵐雪
擬人躰、とは凡ての物を智ある人格を有するものに擬して歌ふのである

火桶炭圍を食ふ夜毎に一つづ、 蕪村

双對躰、とは芭蕉の句「兩の手に桃と櫻や草のもち」や凡兆の句「上行くと下行く雲や秋の天」などのやうに兩者を對ひ合はせる句躰である

今迄、説いた處では、兎も角も俳句を作ること、俳句の内容に如何なる躰があつて何如なる大なる範圍、廣い區域でも自由自在に歌へるといふことは諒解したであらう、扱此上は一層その俳句を上手に作ることに就いての注意、用意を説かう、

うの自己が作りて、自ら推敲し、自ら選んだ結果を先取といふやうな人の元に送り又は持つて居いて説を聞き、又は新聞とか雑誌とかに投じて見るのもいゝ方法である、勿論古今の俳人の俳句等は見る必要があらうが、自己が構はぬから思ふまゝ多く作ることが一番必要、多作は必ず進歩す、誰れでも或点迄はこの作るといふことを音として進んで充分出來うるのである、

切字、といふのがある、即ち「や」とか「かな」とか「けり」とか云ふので「菜の花や鯨もよらず海くれぬ」といふ句の「や」の様な「秋の風の吹き渡りけり人の顔」の「けり」の様な「春雨は今日ばかりとてふりにけり」の「けり」の様な「世の中は三日見ぬまの櫻かな」の「かな」の様なのである、この切字は必ず一句の終りに來るべきものと限らぬ十七字中の何處でも入るのである、始めの五字の終りに「や」を用ゐたらばその終りの五字へ「かな」を入れては、いけぬ等と云つたり、この他斯かる規則めいたものがあるけれど決して、こんなことに意を用ふる事は入らない、此の規則は「何々や」といふて後の五文字の處を「かな」で結ぶ時は、句を打ち破る、駄目な句になる場合が多いといふので斯んな定めをしたのであるが「や」「かな」と一句の中にあつても上手に歌へれば、それで、いゝのである、故にこんなことをかれこれと思ふてゐるひまに一句でも考へて、多く作つた方が勝である、猶例を上ぐるゝ

梅柳さて若衆かな女かな 芭蕉

といふやうに、これで佳句である、

動く、動かぬ、とは五文字若しくは、七文字と、取つて他の五文字とか七文字とかを入れ換へてもままとまつた句になる句があるとするれば、これは動く句である、也有的句に「忠度が捕へて見れば

「益かな」といふのがある、この句は所謂忠度が油坊主を捕まへた、と、いふ歴史があるから、捕へて見れば益かなといふ句が忠度に面白いのである、之れを牛若がとしたら意味が分かるまい、まづ此の忠度云々といふ句は、忠度といふ名詞でなければ、これに當らぬ、外の名詞で動かして見ても駄目である即ち動かぬ句である義經をつけても正成をつけても、若し分かるといふならば動く句である、動く句は決して作つては、可けない、
たるむ句、と云ふことがある、たるむ句とは一句が讀んだ上で、何だか緩漫のやうに、しまらぬ心地のするので、之れに反して、たるまぬ句とは一句の中一字一字しつかりと、よく結びついて、むだな句、よけいな句 が無くしまりのあるといふのである、蒼虬の句に「ものたらぬ月や枯野を照るばかり」といふのがある、この句にて見よ、「ものたらぬ」と「照るばかり」とは、何方か余計である、「ものたらぬ」と云へば「照るばかり」といふ意味も自然と句の上に分かるのではないか、こんな句は「たるむ」のである、初學の人は思ふことをのこらす云ひつくしたいとの、こゝろからくどすぎる、それよりも此の句の中で二つの中、どちらかを消して他の可なり、その景色の中の必要なることを五文字へ入れたならば、佳い句に、なるのである、
故事、を用ゐる事、歴史の事柄を用ふる事、人の名を用ひること、物語などの中の事を取るこ

と、これらの事を俳句の中へ讀み込むことがある、これは季を入れると殆んど聯想といふ上に於ては全じ位の力がある、此れらの事を詠む事は理想躰といふのを前述したが、多くその躰になるのである、

畑打や法三章の札の下

蕪村

この句は漢の高祖が民を治むる爲めに下した法三章の故事を取つたのである、この札の下で百姓どもが安心して畑を打つて居るとの事を想像したので史上の故事を用ゐた例である、この手段は俳句句法の一部として面白いもの左に地名をも詠んだのを例擧する、

熊坂が薙刀を振る霜夜かな

其角

南大門たてこまれてや鹿の聲

正秀

山城へ近江の早稻移しけり

召波

陽炎や手に下駄はいて善光寺

一茶

重ね詞、を用ふることがある、範圍の狭い場合には、この手段は成功するので尙調子の流暢を助くるの功がある、左の例を見たら分るであらう、

星月夜星の高さよ大ききよ

尙白

去來去り移竹移りぬ幾秋乎

藤村

咲くからに見るからに花の散るからに

鬼貫

山吹や葉に花に葉に花に葉に

太祇

虚字、即ち「はら／＼」とか「ぞむ／＼」といふもの、類、これらを用ふる時は、たるみが出来る恐れがあるから、初學者は困難であらう。

ちよろ／＼と常は流るゝ大井川

鬼貫

池の星又はら／＼としくればかな

北枝

ふら／＼と朝顔のゆれうつりけり

冥々

縁語、を用ゆることがある、即ち

出代りや春さめ／＼と古菟籠

藤村

世やうつりかはらの院の蚊遣かな

召波

出代りは二月と八月とに下女下男が交代するので出代の日が春で雨がふる日であつたのと、出代りの時は、主従が分れるのであるから悲しい、それに縁をつけてさむ／＼といふたので雨方へ、かけた字である、次の句は世の遷り變りの變るといふ字と河原院といふのを懸けたのである、この句法

は初學者は必ずやらぬが可い、古來此の句法から失敗したものが多いのであるから、故事にも、縁語にも入れられるが、陸や歌や謠曲等の中の一文句を取つて詠み込んだ句がある、例を擧げれば分るだらう、

鞠なく吉田通れば二階かな

鬼貫

ちぎりきなかたみに濫き柿三つ

大江丸

筈やあまりてなせか人の庭

全人

初めのは「吉田通れば二階からまねく」といふ東海道五十三次の中の事を取つたので次の及び終りのは百人一首の中の語を借りたのである

時間、を保つてゐる句がある、これは過去及び、事實の移る時間を保つのである、

五月雨の石に鑿する日數かな

召波

行秋の四五日翳る薄かな

丈草

かいきえて又あらはれつ雪の鹿

乙二

一昨日はめの山越えつ花ざかり

去來

初學の人は何れの躰から入りてもいいが、前述の躰ではなくて俳風から見て或人は十二躰に名づけ

別けた。

荒海や佐渡に横たふ天の川 芭蕉
 吹き飛ばす石は浅間の野分かな 同人
 五月雨や大河を前に家二軒 蕪村
 夕立や筆も乾かず一千言 同人
 以上雄大躰の例である、

鼻紙の間にしほひ望かな 園女
 草の葉や足の折れたるきりくす 荷今
 蝶の羽にさわらで箔のちうん哉 冥々

織躰の例は右の如く、ずんと繊細に詠むのであるければ弛みの外、何物をも結果として得ないことが多い、注意しなければならぬ躰である、

菜の花や月は東に日は西に 蕪村
 時鳥雲踏みはづしく 露川
 青天に向つて開く牡丹かな 汝村

義 講 法 句 作

右の如き莊嚴にして金石を打つ如き響あるかのものを勁健躰といふ、

よふ螢あれといはんも一人かな 太祇
 秋の日やちら／＼動く水の上 荷今
 思出て、物なつかしき柳かな 木麿
 優にやさしく、しどやかなものを優柔躰といふ、

心太さかしまに銀河三千丈 蕪村
 明家の鼠蝙蝠となりけらし 嘯山
 北へ出れば東へ出れば花の何んの 鬼貫

趣向の平凡なることでも大袈裟に云つて人の氣を突くもので、たゞのおおきかとは違つて中々面白味がある、之れを奇警躰と名づける

風の一日吹いて居りにけり 涼菟
 三日月に必ず近き星一つ 素堂
 山里や井戸の端なる梅の花 鬼貫

奇警躰の如き感なくも、すら／＼と云ひし處、無上の味があるので平易躰と名づける初學の人は、

何んだか、作り甲斐が無いやうに思ふかも、しれぬけれど中々平易に、一寸したことを云ふた、だ
けでも反つて、なまなかのものよりも勝るのである、

金屏の光燿として牡丹かな 蕪村
春雨や枕くづる、謠の本 支考
菜の花や赫奕として寺一つ 柳居

花やかなものである蕪村の特調である艶麗躰と名づくる、
あたらしき茶袋一つ冬籠 荷兮
静かさは栗の葉しつむ清水哉 尙白

寂びたるものである、芭蕉の特調である雅撲躰と名づけて艶麗躰の反対である、
ぬなば生ふ池の水かさや春の雨 蕪村
物云へば二人のやうな秋のくれ 上芳
月影や海の音さく長廊下 牧童
木塚の柱をつゝく住居かな 曲翠

幽趣である曲玄躰といふ

義 講 法 句 作

義 講 法 句 作

冷麥や嵐のわたる嵐の上 支考
八月の青い空から二日月 吟紅
夏川をこすうれしさよ手に草履 蕪村

さらさらと涼しさを感ずるのである、垢ぬけのしたのである輕西躰といふ、
櫻さく傾鳥足二本馬四本 鬼貫
夜桃林を出で、曉暎織の櫻人 蕪村
浮葉卷葉比蓮風情過ぎたらん 素堂

拈据といふ流暢の反対である、この躰はどつ／＼してゐるといつても調を成さないのである、學ぶ
人は誤らぬ様にせねばならない、

春風や三保の松原清見寺 鬼貫
足引の山を下れば柳かな 關更
もつれつゝ水無瀬をのぼる登哉 梅良

琵琶の流暢のもので流暢躰と呼ぶ、この躰の句は中々に多い、以上で十二躰は終つたのである、
漸學の人が常に最も接近して居るはずは、ならず又、考へて居らねばならぬことは、他人の句なり、

句集なりを讀むこと、句作したら推敵をよく忘たらないやうにすることである、句集を讀むには、作者、作者によつて特長があるから、先輩に、よくその昔や今の作者の特長を聞き、又は書に就いて讀んで見た上で特長の處を知つて、そして句集や句を讀むべきである、句集ならば註の附いてゐるのを讀むのが可い、若し仮りに芭蕉を讀もうと思つたら、芭蕉の傳記を併せて、この時代のことも知らなければならぬ、で先づ俳諧の歴史を讀んだらいいであらう、佐藤紅綠氏の「俳諧小史」があるであらう、これで俳諧の史を知つた上で何んでも一人ひとりの傳記と句集や句を讀んだらいいので、これが最も順序いゝ俳諧を知る方法である、初めの中は、もう「いさゝか」といふ所でのいゝ句になる句を推敵が届かない爲めに、口惜しいことが幾何もある、推敵は進歩の通路であるから極めて注意しなければならぬ、興に乗じてすら〜と口から巧みに浮んだ句だとしても、后あとでよく幾度も讀み返して考へて見るのが大事である、嚴重な推敵や注意がなく、只一寸よく出来たものみでは花々しい進歩はないのである、(完)

作 句 法 講 義 終

明治四十五年三月十六日印刷
明治四十五年三月二十五日發行

著 者 明 治 中 學 會

發 行 者 東 京 市 日 本 橋 區 北 島 町 二 丁 目 二 番 地
田 崎 治 久

印 刷 者 東 京 市 京 橋 區 南 鍛 冶 町 五 番 地
牧 口 駒 三 郎

發 行 所 東 京 市 日 本 橋 區 北 島 町 二 丁 目 二 番 地
明 治 中 學 會

電話 漢花 一三八八番
振替口座東京四九八三番



